

博士（文学）辛島 昇氏の“History and Society in South India: The Cholas to Vijayanagar”に対する授賞審査要旨

辛島 昇氏の“History and Society in South India: The Cholas to Vijayanagar” (Oxford University Press, New Delhi, 2001) は、九世紀から一七世紀にかけてのタミル地方を中心とする南インド社会の発展を、きわめて数多くの刻文史料によって検討した著作である。

氏は著書に同じOxford University Pressから“South Indian History and Society: Studies from Inscriptions AD 850-1800” (1984) を出版し、主に九世紀から一三世紀に及ぶチョーラ王朝治下の社会を、ひそび、“Towards A New Formation: South Indian Society under Vijayanagar Rule” (1992) を著わして、一四世紀から一七世紀に至るヴィジャヤナガル王国期の社会を検討し、そこにみられた状況を明らかにしている。本書はその二冊の著書をあわせ、新たにヴィジャヤナガル期の税制についての一章を追加するなどして増補改訂し、九世紀から一七世紀にかけての社会発展の歴史状況を詳細に論じたものである。すなわち、著者によれば、チョーラ朝は古代国

家の最後をなすものであり、一三―一四世紀の動乱を経て一五世紀後半にヴィジャヤナガル王国の支配が確立したところから、西欧の封建制にも比較され得る新しい中世国家体制が出現したという。

氏が史料とするのは、主に石造ヒンドゥー寺院の壁面に刻まれているタミル語の刻文であるが、刻文を史料として扱う研究者はインド以外ではきわめてその数が少なく、わが国では氏のみである。氏のタミル語刻文読解が世界的水準にあることは、氏が「インド刻文学会」の会長、終身名誉会員に推されていることから明らかであろう。

本書に見られる辛島氏の研究は、刻文一つ一つの内容の読解をおろそかにしない精緻なものであるが、それとともに大きな特色をなすのは、研究に計数分析的手法をとり入れていることである。氏は、チョーラ朝からヴィジャヤナガル王国にかけての膨大な数の刻文をコンピューター分析することによって数々の新しい結論を導き出している。すなわち氏は、本書の第一部において、チョーラ朝期に共同的な土地保有が崩れて私的保有が出現したことを土地寄進刻文の分析から明らかにし、それがヴィジャヤナガル期における新しい社会体制の出現を可能にした一つの歴史的条件であるとす。さらに氏は、第一部及び第二部を通して刻文に現れるおびただしい数の官職名や税目などを計数分析し、いわゆる「史書なきインド」にお

いて従来不明であった両王朝の官制や税制を明らかにした。第2部での分析によってヴィジャヤナガル期には、通常は軍事指導者と解釈される大勢のナーヤカ (nayaka) たちが、徴税その他王国の行政に果たした役割を解明した。チョーラ期については最盛期の王たちが中央集権的國家の建設を目指したことを、称号の授与など数々の事実から明らかにし、アメリカの歴史学者バートン・シュタイン (Burton Stein) 氏が唱えた「分節國家 (Segmentary State) 論」(南インドの國家を、数多くの小さな政体が中心政体の王によって宗教儀礼的に統合されたものであるとする) と異なる解釈を提示している。第一部、第二部がそれぞれ独立した構成になっているが、チョーラからヴィジャヤナガル期の南インドの歴史、社会の変遷がよくわかる。しかし、本書全体をとおして、叙述に一貫性を欠くことと、本書としての結論として明確な形がないのは残念である。

辛島氏の研究の強みは自らの精緻な刻文史料分析に基づくものであり、その点で南インド研究におけるパイオニアとして高く評価されている。近年出版された南インド古代、中世史の研究で、氏の業績に言及しない論著を見つけないことは難しく、氏の創出した刻文の計数分析手法は、現在では多くの研究者によって実行されている。二〇〇一年にアメリカ、カナダ、インドの研究者が執筆した氏の記念論文集、K. R. Hall (ed.) "Structure and Society in Early South

India: Essays in Honour of Noboru Karashima" がインドで刊行されたことから、氏の研究がインドおよび諸外国で高く評価されていることが判るであろう。

氏はまた、本業績のほかに、一九七九年にインドの出版社からチョーラ朝タミル語刻文に見える個人名のコンコードランスを他の研究者と共同で出版し、ドラヴィダ言語学会最優秀図書賞を受賞している。さらに一九九九年にはインドの王権についての編著を出版し、昨春には今後のヴィジャヤナガル社会研究に便宜を図るため、ヴィジャヤナガル期タミル地方の刻文に見えるナーヤカ名のコンコードランス "A concordance of Nayakas: The Vijayanagar Inscriptions in South India" (Oxford University Press, New Delhi, 2002) を出版した。

本書は、いわばそれらの研究成果を総括するものであり、中世における南インドの社会発展を、刻文を史料として考察することによって初めて明らかにし、これまでのインドおよび欧米における南アジア史研究に新たな一ページを切り開いた点で、きわめて重要な業績である。